

書評

精神疾患をもつ人を、 病院でない所で支援 するときにまず読む本 “横綱級”困難ケースに しないための技と型



- 著 小瀬古 伸幸
- 判型 B5
- 頁 184
- 定価 2200 円 (本体 2000 円 + 税 10%)
- 発行 医学書院

評者

横浜掖済会病院地域連携部／看護部
緩和ケア認定看護師

平野和恵

人に関心があり、対人援助職としての スキルを上げたいと思う人にお勧めの1冊

まず、表紙の「横綱」のイラストと、「“横綱級”困難ケースにしないための技と型」という副題が気に入った。地域連携の勉強会でよく登場していたテーマの「困難ケース」。ややもすると、当事者に直接会ってなくても、「困った人」と“洗脳”される言葉の魔力がある。しかし、実際の当事者はいたって普通で、困難なのは、そう命名した支援者自身では？と思うこともあった。そんな訪問看護師時代も思い出しながら、本書を読み始めた。

I 章は、作者が精神科訪問看護の専門家になるまでの経験から始まる。「振り返りノートは1か月に大学ノート1冊を超えました」(p.10)の通り、作者の人柄と真摯さが文章から伝わってくる。また、「当事者にとっての三大困り事」(p.11)は、「お金のやり取り」「毎日の食事」「人間関係」とあり、(そうそう)とうなずきながら読み進めた。さらに「私たちのあるべき姿勢」(p.16-19)では、「本人の主体性を取り戻す」ために利用者の今を(専門職として)共有することの大切さと、そのための4つのポイントが明確に記述されている。ちなみにこの4つのポイントは、高齢者の関わりにも適用できるので、高齢患者の多い私の現場でも、早速紹介している。

II 章は、精神科訪問看護で活用できる技が疾患別に丁寧に解説されている、いわば精神科訪問看護のクリニカル・パール集である。細かく触れないが、巻末に「対応技一覧」(p.176-177)がまとめられている。項目名に疾患名は明記されておらず、「〇〇な人」というように、診断名に依らない対象の特徴を捉えている。支援者の経験値が達人レベルでなくても、生活の場で看護を提供する者の「心得」が簡潔に明記されている。ここに書かれていることを、対人援助職が地域包括ケアシステムの一環としてチームで提

供できれば、当事者の重篤化を未然に防ぎ、みんなが安心して生活できる地域になるのではないかな。

最後のIII章は、「精神科訪問看護必須の型」として、精神科訪問看護を行うに当たり踏まえておきたい内容が網羅されている。さらには、訪問看護から訪問看護への転職をした方、訪問看護実務経験が少なく異動で訪問看護に従事する方、開業を考えているベテラン訪問看護師の方にぜひ読んでいただきたい内容である(おそらくこの部分は、著者が新任所長の指導時や、診療報酬改定ごとにバージョンアップしているのではないかな)。また、通常なら、このIII章は、総論としてテキストの最初に書かれることが多いだろう。しかし、これが最初だと、最後まで読まれぬ可能性がある。よって、この構成も本書のお勧めのポイントである。

そして、「長いあとがき」の冒頭の「スキルがなければ事業所は閉鎖に追い込まれる」には、全く同感である。スキルがない看護師は、スタッフにも同僚にも地域にも信頼されない。それを「訪問看護は私に向いていない」などと、1年足らずで管理者が交代するステーションが後を絶たず、とても残念である。

現在私は、病院看護師だが、本書を読み終えて、改めて、「病院でない所で看護師として支援する」試みを組織と相談したいと思うに至っている。

精神科訪問看護に限定せず、人に関心があり、対人援助職としての専門職スキルを上げたいと思っているあなたに、ぜひ読んでいただきたい。あなたが訪問看護師なら、休憩時にパラパラめくっていただくもよし、病院看護師なら、最近増えている「困難ケース」の参考書としてお勧めしたい。看護学生さんなら、これを読んで、精神科訪問看護の楽しさを想像して実習に臨まれると、私もうれしい。